

「信仰によって義とされて」

2022年9月4日

ガラテヤの信徒への手紙2：15～21

佐々木 佐余子

初代教会の頃は、ユダヤ教からの過渡期でいまだ信仰・教理も確定しておらず、使徒たちは苦勞した。しかし、パウロが加わることで大分助けられた。勿論使徒同士の議論はあったが、それを通らなければ何事も決まらない。2章の1節を読むと、パウロはバルナバと一緒にエルサレムに上りました。バルナバはパウロにとっては恩人のような人でバルナバがいなければパウロの伝道も先々不安だったでしょう。バルナバはユダヤ人で経済的に裕福な人でした。彼は聖霊と信仰とに満ちた立派な人だったのです(使徒言行録13章から)。テトスも連れて行ったとあります。テトスはギリシャ人でパウロが、「信仰を共にするまことの子テトス(テトス1：4)」と呼んでいることから、パウロによって信仰に入った人なのです。信仰の同労者であり、協力者でした。パウロはなぜ、再びエルサレムに行ったのでしょうか。それは割礼問題に対処することでした。2章の1節から10節まで読むと主に割礼のことで上京したことがわかります。この割礼問題は皆さん方もうとっくにご存じだと思っので割愛します。11節からは食事の問題に入っていきます。11節からは面と向かってペトロを非難しています。強いですね。さすがベニヤミン族出身です。イスラエルの元祖ヤコブの12人の子供たちは、老齡のお父さんから言われていました。ヤコブの遺言・祝福「ベニヤミンはかみ裂く狼、朝には獲物に食らいつき、夕には奪ったものを分け合う」と言いました。初代サウル王もベニヤミン族出身なのです。遺伝子は代々引き継がれていくようです。先祖が、気が荒い家系は子孫もそのような傾向になるようですよ。パウロ、ペトロを非難する、と見出しがついています。11節を読むと、「さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました」とあります。これは一体どういうことなのでしょう。ケファがアンティオキアに来た時の話、アンティオキアはパウロの伝道の本拠地なのですが、ペトロがその地を訪問したのは異邦人教会とユダヤ人クリスチャンの多いエルサレム教会とが交流できるようにしようと考えたからなのです。12節「なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしだしたからです」とあります。ケファはペトロのことなのですが、異邦人の多いアンティオキアに来て異邦人と食事を共にしていたけれど、後からエルサレム教会のヤコブの率いるクリスチャンたちが来た時、恐れをなして身を引いてしまったのです。このヤコブはイエスさまの弟です。彼らは律法を大事にしていました。ですから、異邦人と食事を一緒にしていることを見られると困るのです。ペトロは天井から吊り下げられた風呂敷の幻を見たはずです。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません」と言うと、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」という幻です。(使徒言行録10:14,15) その幻を見てから、ペトロは態度を改め、

異邦人と食事を共にしていたのでした。けれど、さすが主の兄弟ヤコブ達がアンティオキアを訪問した時、彼らを恐れて身を引いてしまったのです。その態度を見てパウロは怒りました。そして13節にこのようにあります。「そして、他のユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らのみせかけの行いに引きずり込まれてしまいました」とあります。やはり主イエスの弟は絶大な力があるのです。でもこの弟も弟で兄の力を利用して福音を曲げているのはおかしいことではないでしょうか。天上でイエスさまはどのように感じられているのでしょうか。わたしにはそう思えます。使徒ヤコブの方は、もうすでに紀元44年には殉教しているので、今回のヤコブは弟です。ペトロは、いったんはパウロの福音の理解が正しいと認めて、キリストにあっては、ユダヤ人と異邦人の区別はないという立場を受け入れて食卓を共にすることが出来たのに、律法の価値を依然として認めている人々の前に出ると恐れをなして元の立場に帰ってしまったのです。それでパウロは咎めたのでした。

そして、本題に入ります。やはり今までの説明を入れないとわかりにくいのです。見出しに「すべての人は信仰によって義とされる」とあります。この御言葉から宗教改革者のルターはあのような一大改革を实践したのです。本当に御言葉の力はダイナマイトです。行為によらず、律法によらずです。救われるためにする良い行為はとかく偽善になりやすいです。律法は600位あるらしいです。モーセの十戒は大事ですが、それ以外にも細かいのを含めるとその位あると言うことです。律法でがんじがらめに縛られている。モーセの五書と言われる、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記は律法の書と言われ、読んでみるとなるほど律法が多く書かれています。良い律法もあるし、なかなか守れない律法もありますね。そんなに多くの律法があっても人間守れるわけではないのです。律法学者でさえも守れないのに、人に強要する。だから律法学者は民衆から嫌われていたのです。主イエスも激しく批判しています。主イエスは言われました。「彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない」と言われ批判しました(マタイ23:4)。ですからそのように考えても律法は救いの条件ではないのです。主イエスの信仰によって救われるのです。そのことをパウロは15節から21節にかけて説明をしています。キリスト教が今世界宗教になっているのは、このような単純な信仰に依るのです。それがやれ割礼を受けなければ救われないとか、律法を守らなければ救われないとかいったらどの民族も入れないでしょう。ここにパウロの先見性や預言者的使命が与えられていることがわかります。17節は読むと少々わかりにくいのですね。「もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない」と言っています。これはどういう意味なのでしょう。「聖書を読んでわからないなら別の聖書を読め」と言われているので次に口語訳を読んでみます。口語訳にはこのように書かれていました。「しかし、キリストにあって義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるなら、キリストは罪に仕える者なのだろうか。断じてそうではない」と書かれています。

この方が少しはわかりやすいですね。この言い方は律法主義者の言い分なのです。彼らが言うのは、キリストによって義とされることを求める者は、自分が律法の命ずる生活を実行できない弱い罪人なのだ、と認めるのだから、キリストは結局ユダヤ人を異邦人と同じ罪人にしてしまうことだ、それではキリストは人を罪人にさせるだけで罪のために働く人になってしまうだけだ、と律法主義者は非難しているのです。つまり、律法を守れない弱い人が代わりにキリストを信仰し救いを求めている情けのない人たちなのだ、と言っているのです。でも彼らも本当に律法を完全に守っているのでしょうか、疑わしいですね。彼らは見せかけの律法主義者ではないかと思えます。18節でパウロは反論します。「もし自分で打ち壊したものを再び建てるとすれば、わたしは自分が違反者であると証明することになります」と言います。もしパウロが律法による救いを一度否認してキリストを信じておきながら、また翻って律法を認めるようなことをすれば、それこそ罪を犯す者として咎められねばならない、と言います。この場合打ち壊したものは律法です。この律法を再び信じるがあったなら、それこそ非難されるでしょうと言っているのです。19節からがパウロの信仰の真骨頂です。「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです」とありますが、パウロはユダヤ教の律法学者だったころ、律法に忠実に生きようとしたけれど、結局できなかったのです。律法によっては義とされなかったのです。それがパウロの長い間の悩みでした。彼は死んでいたのです。「わたしは、キリストと共に十字架につけられています」とありますが、勿論主イエスと共に十字架刑になったと言うのではなく、キリストが我々を代表して十字架の死を受けたのだから、罪人であるわたしたちも神から死を受けたのだと言っているのです。20節「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と告白します。「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」と言うのです。ここにパウロの信仰が込められています。21節「わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます」と決意を込めています。パウロはキリストの復活を目にして新しく造り直されました。以前の闇にいたころとは別人になり、使徒として世界中を伝道の根拠地にして飛び回りました。

「ガラテヤの信徒への手紙」を執筆したころは、パウロが第3回目の伝道旅行をもうすぐ終わる頃でした。使徒言行録の14章にガラテヤの諸教会での伝道が書かれています。イコニオンとリストラの諸都市です。イコニオンでは大勢のユダヤ人が信仰に入ったけど、信じようとしないうダヤ人もいて異邦人を扇動したことが書かれています。パウロとバルナバは石を投げつけられたけど、次にリストラに行って難を避けたのです。リストラではパウロが、足が悪い人を治したことで、群衆は喜び、バルナバをゼウスと呼び、パウロは話す人だったのでヘルメスと呼んで歓迎したことが書かれています。2人を神々だと勘違いしゼウスの神殿の祭司が花輪と雄牛数頭を連れて来て、いけにえとして捧げようとしたので、2人は服を裂いて止め、偶像を離れて天の神を仰ぐよう説教したことが書かれています。ところ

がしつこく^{たち}質の悪いユダヤ人たちがやって来て、2人に石を投げたので死んだふりをしていたら、あちらに行ってしまう、弟子が来ると起き上がって翌日デルベに向かったということがあったのです。パウロはいろいろな機知と知恵を与えられ伝道していきます。

律法のことですが、イエスさまは言われています。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ 5:17) イエスさまが律法なのです。たくさんの律法を2つに定められました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ 22:37~39) と教えられています。人を愛するとは口で言うほどのやさしいことではなく難しいことですが、キリスト者は高い山をあおぎ見て、生涯この2つの戒めを律法として心に念じ歩みたいと思います。